

常葉大学経営学部 高校生ビジネスプランコンテスト HSBPC NEWSLETTER

2021年5月1日発行

(第2号)

常葉大学経営学部

浜松キャンパス

編集 学生実行委員会



目次

学生実行委員長挨拶、発表大会の概要	1
第9回大会の結果	2
審査の講評、生徒の皆さんの感想	3
先生の感想	6
コンテストの応募状況、特別寄稿	7
次回大会について	8
学生実行委員会名簿	8

学生実行委員長挨拶

経営学部（現4年） 新村玲奈

私たち学生実行委員会は、今大会の開催に向けて準備を進めてきました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、対面による発表大会からプレゼンテーション動画の審査に急遽変更することになりました。大会予定日の直前の変更でしたから、各チームの皆さんの負担は大きかったと思います。とはいえ、今大会を無事終えることができたのも、皆様のご協力によるものと心よりお礼申し上げます。

さて、全10チームの発表動画を拝見しましたが、それぞれ発表方法が工夫されていて、グループの個性を強く感じることができました。SNS上ではありますが、一人ひとりの目つき、仕草、話し方、立ち振る舞いなどの素直な姿勢に惹きつけられました。それに加え、発表内容は予想をはるかに上回るもので驚くばかりでした。プレゼンテーションに真摯に取り組む皆様の姿を見て、勇気ももらいました。今大会の経験は必ず皆様の力になると思います。今後の皆様のご活躍をお祈りしています。

最後になりましたが、私たち学生実行委員会は、高校生ビジネスプランコンテストを更に充実・発展させるよう活動を続けていきます。次回の大会にもご参加いただけたら幸いです。

発表大会の概要

2021年2月6日（土曜日）に予定していた第9回高校生ビジネスプランコンテスト発表大会は、新型コロナウイルス感染拡大により対面による実施から動画による審査に代替し、スケジュールを次のように変更して開催しました。

動画による審査スケジュール

2月 3日（水）動画の受付締切り

2月 9日（火）審査の集計

2月10日（水）審査結果の発表

本年度は静岡県内16高校（249名）から、「ビジネスプランの部」49作品、「調査・研究の部」16作品の応募がありました。1次審査を通過したチームについて、「ビジネスプランの部」は、①実現性、②市場性、③地域性、④独創性、⑤プレゼンテーション発表力、⑥夢を感じ取れたかの6項目。「調査・研究の部」は、①問題意識の明確さ、②調査・研究の充実度、③プレゼンテーション表現力の3項目で厳正な審査を行いました。

「ビジネスプランの部」グランプリに輝いた県立伊東商業高等学校チームミックス4班は、「温泉地の廃材木材が親子の絆を救う」というテーマで、スギやヒノキなどの加工品から出る残余の木片を利用した「魚釣りゲーム」の制作と販売に取り組んだものでした。木片にはリラックスさせる効果があり、幼児は楽しく遊べ、家事・育児で疲れが取れない人をリラックスさせるというもので、すでにこの事業を実践している点も高く評価されました。準グランプリを獲得した同校のミネックス3班は、伊東市内に点

在する空きオフィスを有効活用するためのマッチングサービスを考えたものでした。同市には情報関連企業がほとんどないことから、県外の大学に進学した学生のＵターン就職も可能になるというプランでした。

「調査・研究の部」グランプリに輝いた静岡大成高等学校放送部は、静岡市駿河区の中島地区と長田南地区の２つの地域で住民を対象に行った「南海トラフ巨大地震に係わる津波災害に関する意識調査」をもとに、津波発生時の避難行動に関する問題点と解決策を提案したものでした。特に、収容定員がわずか150人の津波避難タワーであるのも関わらず、ここに避難すれば大丈夫と多くの人が考えており、これでは逆に犠牲者を増やしてしまうという指摘には説得力がありました。準グランプリを獲得した県立川根高等学校は、災害発生時は学校が重要な役割を果たすという問題意識から出発し、避難所運営で最も困るのは高齢のトイレであるという結論に至りました。そこで、教室の机やいす、段ボールやビニール袋などを利用した簡易トイレの開発に取り組みしました。

今大会の大きな特徴は、発表大会進出10チームのうち4チームを県立伊東商業高等学校が占め、さらに「ビジネスプランの部」のグランプリと準グランプリを独占したことです。同校では商業科の「課題研究」という授業のなかに「生活に役立つ経済学」というクラスを設け、地域に密着した問題解決型の学習を進めていますが、その成果が遺憾なく発揮されているといえます。

最後に、前回の第8回大会からコンテストを「静岡県内高校生の学習成果の発表と交流の場」と位置づけ、静岡県内の高校に学習成果を発表する機会を提供し、高校生が相互に交流できる場になることを目指して開催・運営してきました。このことが徐々に高等学校に理解され、回を重ねるごとに応募作品のレベルが上がってきていると実感しています。今後さらに、このコンテストが静岡県の高校教育に不可欠なものとなるよう充実・発展に努めたいと考えています。次回10回大会は、さらに参加校が増えることを期待しています。

(経営学部准教授 森脇一郎)

第9回高校生ビジネスプランコンテストの結果

ビジネスプランの部

調査・研究の部

グランプリ

静岡県立伊東商業高等学校 チームミックス4班

「温泉地の廃棄木材が親子の絆を救う!!」(街おこし部門)

準グランプリ (浜松いわた信用金庫賞)

静岡県立伊東商業高等学校 チームミックス3班

「地域活性化につながる新たなサテライトオフィスの提案」
(街おこし部門)

入選

静岡県立伊東商業高等学校 チームミックス1班

「with 廃棄率! with コロナ!」(街おこし部門)

静岡県立伊豆総合高等学校 夢の国を作ろうチーム

「修善寺温泉 夢の国計画」(街おこし部門)

浜松学芸高等学校 社会科学部地域調査班

「方言ポスタープロジェクト～やっば遠州弁だら～」
(街おこし部門)

グランプリ

静岡大成高等学校 放送部

「静岡市駿河区沿岸部における津波災害に係わる意識調査の実施について」

準グランプリ (遠州信用金庫賞)

静岡県立川根高等学校 川根高校「地域創造」

「車イスの高齢者が使いやすい避難所トイレの開発」

入選

静岡県立吉原高等学校 吉原高校国際科2年

「災害時にも多文化共生社会を維持するために高校生が担うべき役割」

静岡県立伊東商業高等学校 生活に役立つ経済学チームミックス2班

「未利用魚に新たな価値を!!」

静岡県立静岡農業高等学校 松葉研究班

「松葉から分離した乳酸菌の可能性について」

※入選はプログラムの発表順で成績順ではありません

審査の講評

■ビジネスプランの部

審査委員長 経営学部特任教授 芦澤成光

今年度のビジネスプランコンテストは、コロナウイルス感染症蔓延という異常な状況の中開催されました。直前になり映像でのプレゼンテーションへ切り替えが行われたため、参加された高校生の皆さんには、多くの負担をかけることになりました。そんな中でも、優れたビジネスプランを考え、プレゼンテーションしてくださった皆さんに、改めてお礼を申し上げます。

提出された5チームのビジネスプランはいずれも優れており、審査をした先生方の中でも意見が分かれていました。そのような中で5チームについて評価がされ7名の審査員の評価点総計から、決定がされています。今回参加チームのビジネスプランに共通した特徴は、地域性、実現性、夢を感じ取れるかの3点で、高い評価を得ている点です。評価の点差はわずかなもので、いずれも優れたプランになっています。

これからも地域を見つめ、ビジネスプランを考え、実現するという夢を持ち、地域経済の発展に目を向けるように頑張っていたきたいと思います。

■調査・研究の部

審査委員長 経営学部特任教授 鈴木治

高校生の皆様、本年度も常葉大学ビジネスプランコンテストに多数ご応募いただき、誠に有難うございました。今回は新型コロナウイルス感染拡大により、皆様にはコロナ禍での調査活動や発表準備など、これまでにない環境下での研究活動に大変ご苦労されたことと思います。改めまして、応募された皆様に厚くお礼を申し上げます。

今年度の「調査・研究の部」には、9校16件の応募があり、厳選の結果、最終審査には5件が残りました。さすがに最終審査まで残るだけあり、この5件は、どれも甲乙つけ難く、まさに1点を争う接戦でしたが、今回は、調査・研究というジャンルの特性から、発表内容の論理的展開に重点をおいて審査いたしました。この中で1件のみ取り上げて講評するならば、優勝した静岡大成高校放送部の発表は、アンケート調査により問題意識を明確にした上で、実地調査を通してその確認を行い、問題となる原因に関する仮説を立てそれを検証するなど、研究発表の展開は論理的で大変明解でした。また、プレゼンテーション資料の見やすさ、発表方法なども、審査員の高評価を得るものであったと思います。

さて、昨年からのコロナ禍は、私たちのこれまでの生活様式を一変させました。しかし、コロナ禍は私たちが過去の習慣に囚われず、より良い社会や自然環境のために、どんな小さなことでもためらわず実践し、評価し、そして改良することの大切さを教えてくれました。これからは、過去の習慣にとらわれない高校生が主役となり、お互いに協力して知恵を出し合えば、郷土静岡県はもっと元気になっていくはずです。今後とも、このビジネスプランコンテストへの新たな挑戦を期待しています。

生徒の皆さんの感想

■県立吉原高等学校 吉原高校国際科2年 塩崎公大さん（2年）

この度は、このような発表の機会を与えていただき、大変光栄に思います。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございます。発表大会の良さは、互いの発表を見ることで、新しい気付きを得られることだと思います。私たちも、他校の動画を拝見し、自分達の研究に足りなかった要素を見つけることができました。自分達と同じ高校生が、こんなにすごい研究を行っているんだ、こんなにメッセージを伝える力があるんだ、と大いに刺激を受けました。発表後に行った振り返り会では、次のような感想が出ました。「感染症が流行している時代に、高校生である私たちができることを考えて実行することで自分たちの可能性を感じたと同時に、このままでは力不足なことも実感した。もっと学んでいかないといけないと強く感じた。」「防災危機管理課への取材では、質問を考えること自体が勉強になった。行政組織に以前から興味があったが、実際に職員の方とお話することができ、将来の進路意識が高まった。取材結果を検証して問題点を明確にするために話し合いを重ねることで、問題発見・解決能力を培うことができた。」「発表動画の撮影は、慣れないこともあって試行錯誤の連続だった。助言を仰ぐと休校中に先生方が150を超える講義動画を投稿されたときも同じような状況だったと伺い、改めて発信することの難しさと重みとやりがいを感じた。」「この研究を通じて、

小さな発信でも続けていくことで、社会を動かす大きな力になっていくのではないかなと思うようになった。やはり、高校生にはパワーがあるんだ、と確信した。」「今まで考えたこともなかったことを調べたり、話し合ったりした。今の日本は皆が快適に過ごしているように見えるけれど、実際は困っている人がいることを知らないだけなのだという事実を知る良い機会になった。」というものです。私たち吉原高校国際科2年は、「世界基準で考え、地域で行動する」をテーマに日々学習に励むとともに、校外活動として、それぞれが興味関心のある活動に参加してきました。今回の研究は、自分達の活動の意味を再認識することに繋がったと思います。複数の視点で調査や考察を重ねることで、背景にある問題点が明確になって理解が深まり、発表にまとめることで、ぼんやりとした概念だった自分たちの想いが具体化し、一つの意見として構築することができました。これからも、地域に貢献できる学びを目指して、努力していこうと思います。最後になりますが、私たちの研究にご指導・ご協力いただいた全ての方に感謝の意をささげたいと思います。ありがとうございました。

■県立伊東商業高等学校 チームミックス1班 橋本芽依さん（3年）

私たちのグループは地元の特産物でもあるニューサマーオレンジを使って商品開発を行いました。コンテストの結果グランプリは取れませんでしたでしたが、地域活性化のために活動することができて良かったです。また、このコンテストに参加するまでにたくさんの地元地域の方々の力を借りました。地元企業の氏原製菓様には、試食品をつくって頂いたり、商品のパッケージを考えていただきました。内側には私の描いたイラストをいれてもらい、他にはない素敵な商品に仕上がりました。私たちの意見を取り入れてくださった氏原製菓様には感謝の気持ちでいっぱいです。完成した商品「伊豆ニューサマーオレンジラングドシャ」は想像以上のものになりました。袋から取り出ただけでニューサマーオレンジの良い香りがします。味も爽やかでとてもいい商品に仕上がりました。お土産として観光客向けに開発しましたが、観光客だけではなく地元の方にもぜひ食べていただきたいです。インターネットで購入できる予定なので、たくさんの方に伊東のニューサマーオレンジを知ってほしいです。

■県立伊東商業高等学校 チームミックス2班 露木優璃さん（3年）

今回ビジネスプランコンテストに出場させて頂き、とても良い経験となりました。惜しくもグランプリはとることができませんでしたが、この研究に携わってくださった地域の方々には感謝をしたいと思います。ありがとうございます。この研究テーマは夏休みの前から集まって皆で会議を重ね、決定したものです。決して一人では出来ませんでした。このプランが完成したのは支えてくれた班員や、担当の米山先生のおかげです。パワーポイントは、初めての経験でわからないことだらけで苦戦することが多々ありましたが皆で協力し、どのようにすれば見る人に伝わりやすいか相談して作りました。また、発表の際も身振り手振りなどの動作を加えてより伝わるように努めることができました。発表の喋り方や相手の目を見て話すことは社会に出てとても大事な事だと思うので今後の人生にも生かしていきたいと思います。このビジネスプランコンテストでは、他のグループの発表も見れて学ぶことも多かったのもとても貴重な体験ができました。

■県立伊東商業高等学校 チームミックス3班 志村真夢さん（3年）

まずコロナ禍で大変な中、伊東市役所をはじめ企業の方など多くの方々にお世話になり支えてもらいました。また米山先生、山本先生にも助けてもらい、結果として準グランプリを取ることができ本当に良かったです。ありがとうございます。伊東市の問題を見つけることから始め、地域の方々とたくさん関わることができました。不動産会社の方にお話を聞いたり、企業の方にメールでアンケートを取ったり、オンラインミーティングでの発表など初めてのことでとても不安なども多かったですが、良いプランと評価していただきとても嬉しかったです。パワーポイントの製作や発表など難しかったですが、班員たちと協力して作り上げることができ、新たな課題へ挑戦することの難しさや達成した時の喜びなどを学ぶことができました。このプランはとても時間をかけて作り上げたものです。なのでこのプランは後輩に託し、さらにいい案になってほしいです。そしてぜひ伊東市を知っていただき、このサイトができれば利用してください！

■県立伊東商業高等学校 チームミックス4班 渡辺瑞希さん（3年）

私は、今回のビジネスプランコンテストに参加して、地元の課題を深く知ることができ、高校生の私たちでもできることはたくさんあるんだなと感じました。今まで地元の課題について考えることがなく、地元の課題として何があるのかを知りませんでしたが、このコンテストに参加したことで地元の課題に触れることができ地元に興味を持つきっかけとなりました。普段生活をしているだけでは触れることがなかなかできない課題について考えることができたのは貴重な経験になったなと感じています。また、こ

のコンテストに参加するにあたってたくさんの方に協力をしていただきました。協力をして頂きたいところには自分たちで連絡をしてアポイントを取り、実際に伺うということを行って高校生活の中でなかなかない体験だったなと思います。このアポイントというものは、これから社会人になるにあたってとても大切な事だと思うので、高校生のうちに体験できたのはこれからの活かせるものになるなと思います。このコンテストに参加したことで、多くのことを学び、些細なことでも行動をすることでやがては多くのことを変えられるということをもっと体験することができました。この経験がこれからの生活に活かせるよう自分の周りのことに興味を持ち日々の生活を大切にしていきたいと思います。最後に、今回このようなコンテストを実施して頂いた常葉大学の担当者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。来年も私たちの後輩たちがグランプリ受賞できることを願っています。

■県立伊豆総合高等学校 夢の国作ろうチーム 2年生

貴学主催第9回高校生ビジネスプランコンテストに参加させていただきありがとうございました。ビジネスプランコンテストを通して学んだことは、地域の問題や解決しなくてはならないことを見つけることでした。修善寺温泉にはあまり行ったことがなかったので、どのような問題が起きているのかを知りませんでした。しかし、今回の市役所や観光協会へのインタビューや各種調査を通して伊豆市の人口減少や長所や短所を知ることができました。特に、癒されて落ち着く、きれいな旅館がたくさんあり修善寺温泉は、伊豆で最古の歴史があることがわかりました。エリア分析では私たちが知らなかった、たくさんの観光地があることを知りました。コロナウイルスで蜜を避けるため、お店に行けない今こそ、ジオパーク巡りなどの修学旅行ができるといいと思いました。修善寺には伊豆半島で最も歴史がある温泉があり、とても良い場所だなと思いました。さらに来年もまたビジネスプランコンテストに挑戦したいと思います。

■県立川根高等学校 川根高校「地域創造」 渥美卓弥さん（3年）



とても高い評価をいただき、ありがとうございました。このような賞をいただいた驚きを感じつつ、今は嬉しい気持ちでいっぱいです。今回のプロジェクトに取り組むにあたり、私たちは思いつきでつくっては改善を繰り返し、物事を別の視点から考え、練り上げました。その中で私たちはさまざまなことを学びました。とくに、コロナ禍で何ができるか、時間をどう活用していくかという思考力、柔軟性、行動力を鍛えることができたと感じています。私たちは今回、1年間かけて「車イスの高齢者が使いやすい避難所トイレ」を開

発しましたが、どこまでやっても使いやすさに正解はないと思います。このプロジェクトを後輩たちが引継ぎ、より磨き上げ、来年のこの場に再びチャレンジしてくれれば嬉しいです。また、このコンテストに出ること自体に多くの学びがあります。川根高生に限らず、多くの高校生に参加してもらいたいし、広めたいです。本当にありがとうございました。

■浜松学芸高等学校 社会科学部地域調査班 セライヤ桜さん（1年）

今回は、私がこの部活の地域調査班のメンバーになって初めてのコンテスト参加でした。このコンテストの経験から、多くのことを学ばせていただきました。まず、時間をかけてアイデアを固めることも大変でした。現状を説明するための資料集めを各メンバーで分担し、対象となった駅周辺で資料を撮影する担当、根拠となるグラフや資料を探す担当、原稿を作る担当にわかれ、それぞれ作業を進めていきました。私は原稿と発表資料を作る担当でしたが、考えをまとめることにとても多く苦戦しました。どのようにすればより伝わりやすいかをよく考え原稿や発表資料を作成しましたが、その伝え方にとても苦労しました。さらに、スライドは見やすい色を調整したり、配置を考えたりするなど、高校1年生として経験したことのないことの連続でした。そうして全員で時間をかけて作り上げた原稿、プレゼンテーションは自身にとってとても良い経験となりました。今回初の大会出場をオンラインという形で受けることとなり、いつもの見慣れた教室で撮影するというのは逆に緊張感がありました。今回惜しくも目指していた結果とは異なりましたが、この大会の経験を通してアイデアを形にする方法や伝え方を学び、成長の一環となったように思えます。大会での経験を生かし、ますます飛躍していけるように努力していきます。

■静岡大成高等学校 放送部 尾崎萌音さん（2年）

私たちは今回のテーマに係わる調査を2020年の1月から始めました。その結果から、静岡市内のある地域では、多くの住民の方が誤った避難経路をとってしまい、かえって危険な状況に追い込まれてしまうのではないかとこの危惧が分析できました。しか

し、私たちは防災の専門家ではありません。そんな私たちが、発表をまとめるに当たって、一番気をつけたことは、客観的に物事を伝えることでした。3月に東北の被災地への取材を行ったのもその為でした。釜石市鶴住居地区の地域防災センターでの悲劇は、津波災害の場合の避難場所の誤認によって起こってしまいました。助かるはずだった命が奪われてしまったことを、地域住民の方々は現在も悔やまれていらっしやいます。今回のコンテストに参加するに当たっては、本当に多くの方々のご協力やご支援により、発表にまでこぎ着けることができたことを大変感謝しております。アンケート調査を正確に集計し、念入りに分析を行い、実際に東北の被災地で起こってしまったことまでを見聞し、アンケートにご協力頂いた方々に伝える、これこそがご協力頂いた方々への恩返しなのと思って活動を行ってきました。今回のコンテストでは、出場校の発表を直接見て感じ取る機会はありませんでしたが、様々なテーマで工夫を凝らした発表をされており、テーマに対する視点や切り込み方について、大変勉強になりました。今回の受賞をよい機会と捉えて、今後とも取材活動に邁進していきたいと思っています。今回は、本当にありがとうございました。



先生（上位入賞チーム）の感想

■県立伊東商業高等学校 米山圭一郎先生

伊東商業高校では、授業の一環として地域活性化に関するビジネスプランを毎年作成しています。今年度はコロナウイルス感染拡大の影響でビジネスプランに関する多くのコンテストが中止となり、生徒の発表の機会がないのではないかと悩んでいました。そんな状況の中、常葉大学でビジネスプランコンテストを実施するという情報を聞き、生徒の活動の成果をお披露目する機会になればと思い、エントリーさせていただきました。このコンテストで「グランプリを獲得」という目標を掲げた生徒たちは各々が着目した地域の課題を掘り下げ、その解決策を地元企業等との連携の中で考察してきました。そうした活動を通して生徒の中には「自ら考える力」や「行動する力」が育まれたと思います。今回エントリーしたプランは地元企業の方々のご指導ご協力があってこそ完成できたものですが、そのプランについて貴重な発表の機会を与えていただいた常葉大学の関係者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。エントリーしたプラン全てが最終審査に残り、ビジネスプランの部ではグランプリ、準グランプリのW受賞ができたことは、生徒たちにとって大きな自信となり、今後の人生に生かされていくものだと思います。来年度は、常葉大学のホールで発表できるように、生徒と共に地域活性化につながる新たなビジネスプランの作成に取り組んでいきたいと思っています。今後とも、よろしくお願いいたします。

■県立川根高等学校 池田哲朗先生

川根高校からは今回初めて参加いたしました。参加のきっかけは、昨年度末に、実際に出場された他校の先生から紹介していただいたことでした。この度光栄な賞をいただき、とても嬉しく思っております。ありがとうございました。

この1年、生徒たちは地域をフィールドにプロジェクト学習に取り組みました。データ分析を行いながら、コロナ禍の地域で自分たち高校生に何ができるかを問い重ね、最終的にプロジェクトテーマが「車イスの高齢者が使いやすい避難所トイレの開発」と定まったのは3ヵ月後のことでした。その後は試行錯誤の繰り返しです。生徒たちは様々な失敗を繰り返し、多くの大人と出会っては指摘を受けました。しかし、印象的だったのは、生徒たちがいつも楽しそうに活動していたことです。失敗や指摘に正面から向き合い、それを乗り越えようとする中でプロジェクトが伸び、生徒自身も著しく変容していきました。そんな生徒たちの成長に間近で伴走することができ、私は本当に幸せでした。これからの時代、実社会で揉まれながら解なき問いに向き合うことがますます求められると思います。今回その原体験をさせていただいた生徒たちは、今後さらに逞しく生きていくでしょう。改めて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

■静岡大成高等学校 溝口信宏先生

私たち放送部は、普段、地域の問題や現代社会における事象などを題材に、ラジオ・テレビ番組を制作している部活動です。番組を制作するに当たっては、部員たちには、まずテーマに対する基本的な知識を蓄えさせ、その知識を持って現地に行って、自らの足で徹底的に情報を稼ぐということを重視しております。今回は、南海トラフ巨大地震に係わる地震・津波防災に関するアンケート調査についての発表をさせて頂きました。アンケート調査といいますが、一般的には、回答数の多さよりも回収率が高い方が

信頼できる結果と云われております。そこで、各町内会の回覧板と一緒にアンケート用紙を回して頂くことで、多くの回答数、そして高い回収率を共に実現することができました。本校放送部では、部員達が取材してきた内容に基づき、自分たちが伝えたいことを順序よく整理し、それをいかに音声や映像を使って表現するかという構成の段階に多くの時間を費やします。特に、今回は静止画がメインとなるプレゼンテーション方式に初めて挑戦するということもありましたので、間延びがしないよう、必要なタイミングに合わせて適切な文字や写真を提示することを心掛けさせました。放送部というと、自分たち部員のメンバーだけで制作が完結してしまうので、他校の生徒さんたちと交流する機会がほとんどありません。それだけに、今回のコンテストで、様々な学校の発表を視聴したり、意見交換をしたりできる機会を楽しみにしておりましたが、新型コロナウイルスの影響で、対面での発表会が行えなかったのが残念です。コンテストが終了した現在は、制作の現場に戻り、テレビ番組の取材活動を行っておりますが、また、このコンテストの主旨にあった発表ができる機会があった際には、ぜひ参加させて頂きたいと思っております。この度は、このような機会を与えて頂き、本当にありがとうございました。

第9回（2020年度）高校生ビジネスプランコンテストの応募状況

参加総数	ビジネスプランの部	調査・研究の部
参加高校数 16校	街おこし部門 19プラン	16作品
参加生徒数 249人	店づくり部門 11プラン	
	物づくり部門 19プラン	

参加校一覧

《ビジネスプランの部》 10校

静岡県立伊豆総合高等学校
 静岡県立伊豆総合高等学校土肥分校
 静岡県立伊東商業高等学校
 静岡県立磐田西高等学校
 静岡県立清水西高等学校
 静岡県立下田高等学校
 静岡県立葦山高等学校
 静岡県立沼津商業高等学校
 浜松学芸高等学校
 静岡県立富士宮北高等学校

《調査・研究の部》 9校

静岡県立伊豆総合高等学校土肥分校
 静岡県立伊東商業高等学校
 静岡県立川根高等学校
 静岡市立高等学校
 静岡大成高等学校
 静岡県立下田高等学校
 静岡県立農業高等学校
 静岡県立三島北高等学校
 静岡県立吉原高等学校

◆◆◆ 特別寄稿 ◆◆◆

第9回高校生ビジネスプランコンテストの感想および浜松いわた信用金庫の取組みについて

浜松いわた信用金庫 法人営業部 新産業創造室長 高橋伸治

コロナ禍で様々な交流・活動が難しい中、参加者、運営者の皆様には大変なご苦勞をされたと思います。皆さんが取り組んだテーマは、いずれも地域にとって解決すべき重要なものと思います。それらに真剣に取り組み、自分たちの言葉で、自らの考えを取りまとめた発表であったと思います。皆さんのご努力に対して、「ご苦勞様でした、引き続き自分たちの課題として、コトを起こしてください」と、直にお伝えできないことが残念でした。

さて、浜松いわた信用金庫は、預金や融資という金融機能を通じて地域に貢献してきましたが、今後は地域課題についても、自らの活動を通して答えを求めていくことが使命だと考えています。我々の営業エリアである静岡県西部地方は、輸送用機器産業という基幹産業が大変革期（EV（電気自動車）化、労働人口減少、サプライチェーンの崩壊等）に直面しており、地域経済の活性化への取組みが急務です。そこで、我々は浜松駅前にあるザザ中央館B1Fに、「Co-startup Space & Community FUSE」というイノベーションハブ拠点（起業家、起業を目指す人、中小企業、大企業、研究者、学生、投資家等有機的に集まり、地域の産業育成を目指す場所）を昨年6月に設立しました。FUSEは金融機関の支店でも本部でもない場所です。金融機関は、今までビジネスプランが固まったお客様に、設備資金なり運転資金を提供してきました。今回、我々はFUSEでビジネスプランが定まる前の起業家や新事業展開を模索する中小企業の方々と、共通体験を積重ねることで起業家たちに寄り添い、同じ将来を描くことができるパートナ

ーを目指します。そして、将来的には信用金庫の枠を超え、斬新で柔軟な総合サービス業への脱皮を目標としています。地域の課題を解決するために、新しいコトを起こそうとする皆さん、是非、FUSEに遊びに来てください。

Co-startup Space & Community 「FUSE」
静岡県浜松市中区鍛冶町 100-1 ザザシティ浜松中央館 地下1階
アクセス：JR 浜松駅・遠鉄新浜松駅から徒歩 5 分
<https://hamamatsu-iwata.jp/business/sogyo/fusehamamatsu/>

第10回発表大会（2022年2月実施）について

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、第9回発表大会は対面実施を中止し、各高校から提出された10分間の動画を審査する方法に変更して開催しました。この発表大会の準備を進める過程で「Zoomミーティングシステム等を用いたオンラインによる発表大会ができないか」というご意見もいただきましたが、非常時は「機器の操作や設定に一定の習熟を必要とせず」「誰でも簡単・確実に扱え」「トラブルがなく確実に情報が伝わる」ことが最重要であると考え、Webを用いた動画審査の方法に決定しました。そして、各高校から提出された動画は、学生実行委員長の新村玲奈が所属する長崎洋康ゼミにWeb制作をお願いし、大きなトラブルもなく発表大会を終えることができました。ご指導いただいた高校の先生をはじめ長崎ゼミの皆さんと最終審査員の方々のご理解とご協力に紙面をお借りしてお礼申し上げます。

さて、参加資格を全国の高校から静岡県内の高校に限定し、「静岡県内高校生の学習成果の発表と交流の場を目指す」というコンセプトに変更して2回目の大会が終わりました。コンセプト変更直後に開催した第8回大会（2019年2月実施）では、発表大会終了後、本学学生食堂で1時間程度の交流会を設定しましたが、今回のWeb審査による発表大会方式では当然のことながら交流会を開催することができませんでした。しかしこのことは、コンテスト担当責任者として「高校生同士の交流」とは何か、「交流」の意味そのものを問い直す契機となり自問自答を繰り返しました。その結果、このコンテストが目指す「交流」とは、各チームの発表内容に即して高校生同士が真剣に議論すること。つまり、高校生同士が「鍛え合う場」にすることではないかという考えに至りました。そこで、次回の第10回大会から学生食堂での交流会を廃止し、その時間を質疑応答の時間に充当するよう変更します。具体的には、これまでの1チーム15分（発表10分、質疑応答3分、交代2分）から1チーム20分（発表10分、質疑応答9分、交代1分）に延長し、「質問に対し適切な応答ができていないか（発表内容が自分たちのものになっているか）」という一項を追加し、審査の重点項目として位置づけます。高校生の皆さんには、自分たちの問題意識や発想・着想、調査・研究の成果を練り上げた作品にまとめるとともに、活発な質疑応答が展開されることを期待します。

最後に、新型コロナウイルス感染症が早期に終息し、第10回発表大会で皆様と直接お会いできることを願っています。しかし、引き続き対面で実施できない場合、先に述べた理由から今回と同様に動画提出・Web審査方式で発表大会を開催します。ご理解とご協力をお願いいたします。

（経営学部准教授 森脇一郎）

2020年度学生実行委員会（氏名・学年・出身高校）

新 村 玲 奈（3年）浜松日体	山 田 裕 介（4年）沼津東	渥 美 和 土（3年）浜松湖北
安 東 悠（3年）浜松湖東	大 石 由 佳（3年）浜名	木 股 翔（3年）岐阜県立各務原西
ヒトミ アイコ（3年）浜松江ノ島	赤 堀 観 月（2年）磐田西	佐々木 晴 菜（2年）浜松湖北
宮 川 晃 汰（2年）磐田西	山 下 裕 貴（1年）浜北西	井戸畑 颯（1年）浜北西
三 輪 怜 央（1年）浜北西	野 田 康 太（1年）浜北西	松 川 皓 太（1年）浜北西
谷 口 和 希（1年）浜北西	野 中 星 那（1年）磐田農業	山 田 裕 雅（1年）磐田西
水 野 杏 美（1年）磐田北	鈴 木 葵 唯（1年）	高 橋 美 琴（1年）磐田西
竹 内 結 衣（1年）浜松湖南		